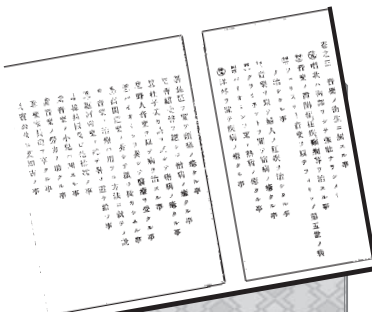


音楽療法から読む『音楽利害』

— 明治期の音楽書を読むとき

屋部 操



以前どこかで、若い世代向けの

文庫では、夏目漱石の小説の「車」と注を入れてある、と読んだことがあります。タクシーを使ったのだと思ってしまうから、ということでした。明治期の本を読むには、当時の時代背景や空気感もある程度は理解していないと、このような誤解も生まれます。とはいえ資料に接して、そのあたりのごとを理解するのはなかなか難しいものです。

前置きが長くなりましたが、ご紹介するのは神津仙三郎著『音楽利害』（明治24）です。古今東西の凶書を渉猟し、音楽の利と害についての記述を主題ごとに列挙している引用文献集です。ここに掲げられている量が半端でない。しかも日本の古典だけではなく、欧文も、漢籍も、というのですから、個人の著作でこれほど幅広く目を

配っていることに驚くほかはありません。引用書目の一覧だけで、19頁もあるのです。

巻之三は「音楽ノ衛生ニ関スル事」で、今日という音楽療法にあたる事柄が集められています。ここにある20の記述のうち、6つは「音楽衛生論」からの引用です。神津がこの本を重要視していたことがよく分かります。原書は『The influence of music on health and life』（1875）です。「音楽衛生論」とは実によく訳だと思いませんか？著者はフランス人医師で、これは仏語から英語への翻訳書です。原書が出た1年後に英訳が出版されていることからみても、この主題が当時注目されたことが分かります。とはいえ翻訳者は著者に対して微妙な距離をとっています。というのには、著者自身が構想は1846年から、と断っているように、音楽についての、ある捉え方が発表当時すでに時代遅れの面があつたためです。医師とし

ての著者は、臨床場面が音楽の力によって動くことを解明したいとの思いから、そこに何か物理的なものが存在するのではないかと仮説を立てたのです。その部分は当時ですら到底受け入れがたいものではあつたのですが、音楽を臨床の場に適用することのままとつた最初の記述である、という価値は、その仮説の時代的制約で減ずるものではなく、神津もそうした部分はすんなりと飛ばして、必要と考えた部分だけを引用しています。

さて、この明治期の大著を読んでいる不思議に思うのは、どうやら当時、雅楽は上品で三味線は下品とされているらしいことや、淫楽として、ある種の音楽を退けている価値観です。現代に生きている私たちは伝統邦楽になじみはなくとも見下すものでもありませんから、ここは理解のための手助けが必要になります。

そこで参考になるのが『ドレミ

を選んだ日本人』と『国家と音楽』です。どちらも明治について、「頭で理解する」というフィルターを通して述べられているからです。当然知っているだろう、という時代の空気感の共有を前提としている記述ではついていけない私たちでも理解できるものでした。こうした本を読んでから、例えば田辺尚雄の『明治音楽物語』を読み、その上で『音楽利害』に取り組むと、受け止め方が少し変わって行くことでしょう。

まず当時と現代のスピード感が違いますし、音楽も専門化しておらず、素朴に「智育・体育・徳育」がゆるやかにまとめて捉えられ、「人を育てる」ということにフォーカスできていた時代です。この視点に時間を加え、特定の人間の成長にフォーカスすると、当然「進歩・向上」が起こり、その先は、日本ではその後新設される音楽大

学は西洋クラシック音楽一辺倒へと舵が切られていくことはみなさんご存知ですね。激動の明治は制度上の変化は目まぐるしく、人の暮らしも緩やかながらも、去年と今年には確実に変わっていく時代でした。平成生まれのみなさんには難しいことですが、昭和での64年間の変貌も考えて、明治に想像力を働かせてみてください。

● やべ みさお 宮本常を何冊か読み、日本に道路ができた頃、天狗もきつねもたぬきもいなくなつたことに気づきました。それほど昔のことはなかったのです。

・『音楽利害』復刻版。大空社 (C53-029)
・『ドレミを選んだ日本人』音楽之友社 (J110-731)
・『国家と音楽』春秋社 (J113-496)
・『The influence of music on health and life. 復刻版 (J115-247)
復刻版は目次と序文が欠けている・原本は貴重書として所蔵